

東日本大震災およびそこからの復興 に関する倫理レベルからの論点整理： 「民主主義」について

関口 海良

2011年8月6日

注 意 点

本エッセイの目的はみんなの議論を刺激したり、より明確にしてもらうためのヒントになることです。文章は断定的な表現になっていますが、それだけ確実というわけではありません。また本エッセイの目的は正解を提示することでもありませんし、実験的な議論を含めていますが何か新しいことを言うことでもありません。

本エッセイの「概要」にある文章は、2011年5月7日に筆者のウェブサイトにつづたチャリティーのページ [1] に自分で公開したものです。ただし、誤字・脱字は見つけ次第訂正していつています。本エッセイの内容には、概要を発表した当時に筆者が想定していた議論よりも、さらに進めたものをかなりの程度含めています。

本エッセイは三部作の第三弾です。第一弾では「自由」という視点から、第二弾では「平等」という視点から論点を整理しています。

本エッセイの内容は日本についてのみ当てはまるものとしします。なぜなら、国や地域によって自由、平等や、民主主義に関する歴史や受け止め方は異なり、ここで普遍的な議論をすることは困難だと考えたからです。

概要

東北の人々の我慢や助け合いは多くの人々に感動を与えたが、民主主義に関する議論の中では、特異な事例としてのみ扱われることになるだろう。なぜなら、民主主義の基本的な論理は最悪を回避することであって、最高を目指すことではないからである。そしてそのためには、性善説に基づくわけにはいかないからである。スポーツや芸術を見たり行ったりすることは、この煮え切らない気持ちを取り除いてくれるだろう。これらは最高のパフォーマンスや一番を目指すものだからである。

最悪を回避するために少しずつ我慢をする方を選ぶというのは、今回の原発に関する議論でもでてきた論理だし、終末期医療など、他にも類似の議論を見つけることができる。この深さの問題には全員が賛成するような解答を導くことはできないだろう。できることは、考察や議論を続けていくことである。

復興に向けて特別に活動していく以上は、特に何もしないで得られるはずの未来よりも、より良い未来が結果として得られた方がよい。ただし、全ての人があるような結果を得られるとは考えにくい。さらに言えば、意見を求められたとしても、期待した通りの形で反映されることはまれだろう。これらは、例えば、異なった利害の全てをいっぺんに満たす設計はできないからである。

そこで、諦めずに主張し続けることが重要であるとされる。意見を聞いてもらう相手を選ぶことも有効だが、公正さは保たれるようにしないと行かない。議論することそれ自体にも意味があると言われているが、これは個人にとってというよりは、主にマクロな視点から見た話だと理解できる。また、問題を設定から変えてしまうことも有効である。

アイデアの選択に関して、比較的良く受け入れられているものとして、多数決を用いることができる。少数派が引き受ける負担も考えなければいけない。専門家の提案のうち、今は多数の支持を得ていなくても、後で多数の支持を得られる可能性があるものや、専門的であっても何か特別な価値があるものがあれば、それを採用していくことも少しはあって良いだろう。

はじめに

本エッセイでは、民主主義という視点から意思決定について述べることにする。これは東日本大震災に関する重要である。なぜなら、より良い意思決定を、より納得した形で行なえた方が、より良い復興につながると考えられるからである。

ここで言う民主主義とは、自由と平等という価値に基づいた社会をみんなで作る運用する仕組みのこととし、またその仕組みを良いものとして大

切にしたり新たに実現していこうとする立場のこととする。ここでは現在の日本において言うところの民主主義を主に想定している。民主主義という視点が有効なのは、日本の国家はまさに民主主義に基づいているからである。そしてさらに、国家以外の自主的な組織においても民主主義に基づいて意思決定を行なうことは良くあるからである。

本エッセイでは、次の三つのポイントを特に強調することにする。

- i みんなが参加することが最優先だということ
- ii 専門家も一人の国民だということ
- iii 自由と平等という価値だけでは足りないこと

以下、ひとつずつ見ていくことにする。

i みんなが参加することが最優先だということ

民主主義ではみんなで物事を決めていくことが重要となる。なぜなら、民主主義にとって何よりも重要な価値は自由と平等だからである。

自由と平等が何よりも重要である

民主主義にとって重要な価値は自由と平等である。以下、五つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、民主主義に基づく社会とは少し遠回りをしていると感じられるものである。なぜなら、それは自分たちで自分たちのことを決めるというものだからである。国家としてこれを実現していくためには、全国民が意思決定に参加するか、少なくともそうしたとみなせることが必要になる。いずれにしろ、そのような意思決定には時間や手間がかかることは明らかである。例えば、みんなの意見を聞いたり取り入れることを重視すればそれだけ解決策を導くのが遅れることになる。また、多数決に基づく選挙では最も優れた政治家が選ばれるとは限らないことも明らかである。言い換えれば、民主主義における社会とは問題解決の迅速性や解決策の有効性を最優先しているわけではないというのである。類似の課題は国家についてだけではなくて、他の自主的な組織においても民主主義を採用した場合には当てはまる。ちなみに、民主主義という用語は元をたどれば多数の民衆による支配を意味するものにつながる。現在ではこれに基本的人権の考え方が導入されているので、全員がそのような支配者になれるものと理解できる。

二つ目として、そうは言っても、みんなの意見を瞬時にまとめるなどして、迅速かつ有効な判断をしていければリーダーとしてより高い評価を得ることは間違いない。さらに、人々の要求を先取りし判断していれば最高である。ただし、どちらにしろ失敗をしたら最悪に近い評価を受けることも確かである。なぜなら、他者を軽視した傲慢な判断であったとみなされるからである。以上のことは国家以外にもあてはまる。

三つ目として、民主主義では意思決定の結果ではなくプロセスを管理することが主な課題となる。なぜなら、その方が簡単に自由と平等を実現できるからである。まず、そもそも参加する権利はみんなに平等にないとおかしいと言える。さらに、そこから生じる結果も自由と平等という視点から満足できるものになると期待できる。なぜなら、自分たちのことについて自分たちで決めることになるからである。この議論は前回のエッセイ [2] で述べた条件についての平等につながる。その一方で、結果の方を管理することは不平等につながる可能性が高いと言える。なぜなら、扱う問題が複雑すぎるし、大きな権力の集中を必要とするし、権力そのものに人を墮落させる傾向があるからである。

四つ目として、民主主義に関する議論においては何が最悪かを想定することが重要である。しかし、これは簡単ではない。まず、民主主義の最も重要な特徴のひとつとして、最悪な政治形態を回避する可能性が高いことを挙げることができる。具体的には、暴政や専制などがそのような政治形態の例であると言える。なぜなら、これらの政治形態は人の生命を理不尽に奪う可能性があるものだからである。その一方で、民主主義が最も理想的な社会の実現を目指していないことは、問題解決の迅速性や有効性を最優先していないことから明らかである。人によってはこれをもって最悪とみなす可能性もある。いずれにしろ、これからも考察や議論を続けていく他はない。筆者としては、いろいろな問題はあるにしろ、今後も自由と平等に基づく社会を維持し洗練させていくのが良いと考えている。他にも、原発や終末期医療についての議論も、何をもって最悪とみなすかの判断が難しいことを示している。

五つ目として、民主主義に関しては議論をすることそれ自体にも価値があると言われる。立場の異なる人達と議論することで改めて気付くことがあるなど、さまざまな利点が指摘されているので、各自で調べるなどして役立ててもらえればと考えている。しかし、最終的に自分の意見が反映されなければやはりやるせない気持ちにはなるだろう。重要な点は、そもそも全ての要求を一度に満足させるような設計は不可能なこと

である。そしてそれゆえ、意見が対立したり却下されることは民主主義に限らないことである。むしろ、民主主義はそのような自由な議論を保証するからこそ重要であったことは、思い出しておく必要がある。

要するにまとめると、民主主義にとって重要なことは自由と平等という価値から問題を解決していくことであった。

何をもってみんなが参加したとみなすか

みんなが意思決定に参加することが重要であるとして、それをどのように実現するかは大きな課題である。以下、二つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、多数決という方法を用いることができる。これによって全員の意見が一致しなくても不満が出にくくなるような決定を下すことができる。ただし、少数派を尊重しまた多様性を保証していくことも引き続き重要である。

二つ目として、代表者を選ぶという方法を用いることができる。これによって全員が実際に参加しなくても良くなる。ただし、どのように代表者を選ぶと正当と言えるかは依然として大きな問題である。

他にも、民主主義においては様々な方法が以外と広く認められているので、各自の判断で自分の活動に取り入れてもらえればと考えている。

要するにまとめると、いずれの方法も便利ではあるが完璧でないということであった。

注意点

民主主義に基づく社会については注意が必要なことがある。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、民主主義がどんなに遠回りをしているように思えても、政治には最大限の努力を求め続けたいといけない。例えば、法の内容や政策に納得がいかない場合は、所定の手続きによって変更を求めることもできる。この際に重要なことは公正さを保つことである。具体的には、相談する相手を変えることで問題が解決できる場合もある。また、問題の設定から変えることも有効である。例えば、復興を地域の問題と考えるか日本全体の問題と考えるかなど、想定している広さを変えることができる。

二つ目として、民主主義に従わない方が良い場合もある。例えば、優れた製品が経営者やデザイナーの強烈な個性によって産み出されている

場合も多い。このような活動を組織として行なう場合であっても、そこに参加するのも抜けるのも自由というのであれば独裁的であっても問題ないと言える。ちなみに、国家や政治に関して民主主義が特に重要なのはそれが強大な強制力を持ち得るからであった。

三つ目として、国政だけが社会の全てではない。例えば、スポーツや芸術によって感動や希望をもらえることはすでに経験してきた通りである。重要なことは、これらの活動を社会や生活の中に上手く組み合わせていくことである。

要するにまとめると、民主主義も完璧ではないということであった。

ii 専門家も一人の国民だということ

民主主義の社会においても専門家をどのように扱ったら良いかはしばしば問題となる。なぜなら、専門的な知識やそれを扱う専門家の影響力は大きいからである。

法を守っていれば問題ないこと

民主主義における社会では、専門家が専門的な知識を駆使して社会を変えていったとしても基本的にとめることはできない。以下、二つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、自由を前提とした社会では、法を守っている限り誰が何をしていても外から強制的にとめることはできないということが重要であった。これは相手が専門家であっても当てはまる。それは実業家が事業を通じて社会を変えていっても法を守っている限り問題がないのと同じである。専門家に対して要求がある場合には、民主主義に則って依頼したり主張していく必要がある。

二つ目として、専門家の活動を促す力が社会には存在している。なぜなら、専門的な知識は個人、大学、企業や、国としても強力な競争力になるからである。このことも実業家の役割に近いと言える。

要するにまとめると、専門家であっても一人の国民ということであった。

自分も専門的な知識を身に付けた方が良く

民主主義に基づく社会においては自分も専門的な知識を身に付けていった方が良く。なぜなら、専門家をとめることは基本的にできないからで

あった。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、最終的な判断を自分で行なうのであれば、やはり自分が知識を身に付ける他はない。なぜなら、知識がないと良い判断が難しいからである。

二つ目として、専門家と協力していく際には、自分でも判断ができるよう専門家から十分に情報を伝えてもらうことが重要である。専門的に言えば、インフォームドコンセントが重要である。自分が第三者として関係しているなど専門家と協力していない場合は、やはり自ら取り組んでいく必要があると言える。

三つ目として、法という仕組みがあったとしても、自分で判断し対応しなければならない場合がある。なぜなら、法という仕組みも完璧ではないからである。例えば、個人であっても民主主義に則っとりながら専門家に要求をしていくことは可能である。しかし、専門的な知識を自分でも持っていないと交渉が厳しくなるのは明らかである。他にも例えば、新しい科学技術に関しては規制が存在しない期間が生じることになる。なぜなら、法を定める際には慎重さが求められるからである。この期間は各自の判断が重要となる。そしてそれゆえ、専門的な知識を自分も持っていた方が有効となる。

要するにまとめると、基本的に自分のことは自分で守るという態度が求められるということであった。

注意点

専門家と協力していく際にはその人とどのような人間関係を築くかが大きな課題となる。特に、専門家にボランティアとして復興活動に参加してもらう場合には注意が必要である。なぜなら、報酬によって人間関係のバランスを取ることができないからである。以下、二つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、一般人と専門家が協力していく際にもお互いに相手の立場に立って考えてみるのが有効である。一般の人にとって重要なことは、自分ならどうするかを専門家と一緒に考えてみることである。ひとつの理由としては、その方が専門家が居なくなっても自分で対処できるようになるからである。専門家に関しては、良いアイデアを提供したり、リスクを回避させるよう努めるだけでなく、上手に説明することも求められることになる。ただし、どのような人でも新しいことを理解するには単純に時間が必要な場合があることには注意が必要である。

二つ目として、良いアイデアを出すことの大変さを両者とも良く知っておくことが有効である。例えば、専門家にアイデアを見てもらう場合である。まず、専門家であれば優れた指摘ができるはずである。問題は、それをもってその専門家の方が偉いという雰囲気になる可能性があることである。この上下関係は真実を現しているとは限らない。なぜなら、最初にアイデアを出すのも尊い仕事だからである。アイデアを産み出すこととそれを検証することは別の種類の仕事だと考えた方がよい。

要するにまとめると、専門家とは上手に付き合っていくことがより良い結果につながるということであった。

iii 自由と平等という価値だけでは足りないこと

民主主義にとって重要な価値は自由と平等であるけれど、これらだけでは十分でない。他にもさまざまな価値を取り入れていくことが重要となる。以下、特に重要な三つの例について述べる。これらの例によって示したいことは、どのように論理を組み立てていけば良いかである。

生命を大切にする

自由と平等に基づく社会においては、自分も含めて生命を大切にしないと社会が安定しない可能性がある。以下、三つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、自分の生命を大切にしない人にとっては法の持つ効果が小さくなる。なぜなら、法による刑罰の抑止効果が働かないからである。そしてさらに、古代ギリシャのように法そのものに敬意を払うことは現在ではほとんどないからである。ちなみに、連帯責任をより積極的に導入して対処していくことで対応することができるとしても、それは危険な結果につながるのをやめた方がよい。

二つ目として、自由という価値からは生命を大切にすることは導けない。なぜなら、自分や共同体の自由を守るために自分の生命を賭することは英雄的であると考えられがちだからである。この意味では、自由を尊重することと生命を大切にするとは相容れない。それから、自分が英雄になるために他者の生命を手段として用いることは正当化されないことは明らかである。

三つ目として、平等という価値からは生命を大切にするとは導けない。なぜなら、平等という考え方は価値の配分に関するものであり、どのような価値を扱うかについては何も定めていないからである。例えば、生

命を無駄にする機会を平等にしていくことも論理的には可能である。これでは問題がある。

要するにまとめると、自分を含めて生命を尊重することが有効になるということであった。

労働を選択する

自由と平等に基づく社会においては、労働を肯定することができないと生きていくのが困難になる可能性がある。なぜなら、多くの人は労働をしなければ生計が立てられないからである。ここで言う労働とは、自分や家族が生活をしていくために組織や社会の歯車となって働くような活動のこととする。以下、二つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、生活をしていくためには自分の自由を制限してでも働いてお金を稼がないといけない。もちろん、労働を進んで選択するのも自由でありそれはむしろ肯定されるべきである。労働が問題になるのは、それが極端な形をとると基本的人権さえも侵害されてしまう恐れがあるからである。

二つ目として、経済的に自立しているということそれだけで社会的にも大きな意味がある。なぜなら、その分だけ他の人の自由に迷惑をかけないでいられるからである。そしてさらに、現在の社会では納税を通して社会全体にも貢献しているはずだからである。

要するにまとめると、どのような形で自由な生活を手に入れるかは各自の判断によるのが良いということであった。

仕事で取り戻す

自由と平等に基づく社会に限らないが、仕事をすることで救われる可能性がある。ここで言う仕事とは、世界にとって、つまり社会、自然や、他の人にとって価値のあるモノやコトを作り出す活動のこととする。仕事が救いにつながることに関しては、筆者は以前に発表したエッセイ [3] の中で否定したこともあったけれど、ここで改めて肯定することにする。また、救いに関しては他にもいくつかの宗教が教義をもっているはずである。ただ、ここではそのような教義に関して正しいとか間違っているなどと論じる意図はないことは強調しておきたい。以下、五つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、人はしばしば罪の意識を持つ。これから先の議論に

においては、気持ちの上だけではなく実際に罪を背負うことになるかと仮定する。なぜなら、その方がより辛い状況になると考えられるからである。また、ここで取り上げる罪とは、法によって定められている犯罪に関する罪ではなくて、信条の上での罪である。例えば、理想通りの人に成れないことや、失敗をしてしまうことによって感じられるような罪である。重要な点は、自由と平等に従った考え方だけではこのような罪から救われるための論理が弱いことである。なぜなら、基本的には自分で責任を取るようになるからである。

二つ目として、罪を背負った人であっても優れた仕事をすることはできる。まず、優れた仕事をするということは、世界にとって価値のあるものを作り出すということである。その意味では、それを成し遂げたことによってその作者にも存在意味を認めることができる。次に、仕事の評価とその作者の人としての評価とは分けて行なうことができる。そしてそれゆえ、その仕事によって獲得された存在意味を、どのような罪を背負っていたとしてもその作者に対しても加えることができることになる。実際、社会にもこれらを分けて評価する傾向が存在している。ここで重要なことは、仕事では作者の良いところだけを積み上げて実現することである。その一方で、人物としての評価においては人生の全てが問われることもあることである。

三つ目として、仕事によって罪が取り消されることが無かったとしても、仕事の評価が罪の評価を上回ることは許して良いと言える。言い換えれば、罪を背負っている人であっても、優れた仕事をした人にもなれるはずだということである。もちろん、社会においては人物としても優れていることが望まれることは明らかである。

四つ目として、優れた仕事をしていても社会から高い評価を得られるとは限らない。このことは仕事をしていても救いにつながらない可能性を示している。ここで宗教を取り入れれば、神様は全てを見ていて正しく評価してくれるから問題ないということになるかもしれない。いずれにしろ、自分のできることを行なっておくことが重要である。そうすることで、少なくとも自分の気持ちの上では救われると言える。

五つ目として、救われるために仕事をするというのは矛盾につながる。なぜなら、良い仕事をする上で多くの場合に求められることは自分のためだけでなく相手のために仕事をする事だからである。そしてそれゆえ、自分が救われたいと思えば思うほど相手のために活動しなけりなくなるからである。自分の中で何のためにその仕事をやっているのかを整理

していく必要がある。

要するにまとめると、仕事という考え方を取り入れることで自分が救われたと思った時に考慮できる選択肢がひとつ増えるというであった。

注意点

自由と平等に加えて、どのような価値を取り入れていったら良いかを考える際には注意が必要である。以下、二つのポイントについて述べる。

ひとつ目として、この問題を論理的に考え過ぎると自分も含めて人をその有用性だけからで判断してしまいがちなので注意が必要である。論理的に人や社会について考える際に重要なことは、自由や平等について改めて考えることである。なぜなら、これらは個人の存在意味を役に立つかどうかでは判断しないものだからである。

二つ目として、自由と平等という価値が本当に良いものかを問い続ける必要がある。なぜなら、それらも絶対に正しいとは言い切れないからである。例えば、時代や論者によってそれらの表す意味が異なっていることがそれらの不安定さを示している。

要するにまとめると、どのような価値を採用するかを考える際にも注意が必要ということであった。

おわりに

本エッセイでは、民主主義という視点から意思決定に関して述べた。

まず、民主主義としてはみんなが参加して決めていくことが重要なことについて述べた。ただし、実際にはそれが不可能な場合であっても、多数決や代表者を選ぶといった方法を用いることで対応できることについて述べた。

次に、民主主義においては専門家も国民の一人に過ぎないことについて述べた。そしてそれゆえ、専門家と共生していくには自分も専門的な知識を身に付けていった方が良いことについて述べた。

最後に、民主主義に基づく社会においては自由と平等という価値だけでは個人にとっても社会にとっても不十分なことについて述べた。これらを補完する価値のひとつとして、自分も含めて生命を大切にすることが有効なことについて述べた。

要するにまとめると、これからも民主主義という視点から社会について考えていくことは有効ということであった。

cf. Abstracts in English (「概要」の英語版)

In terms of democracy, the patience and the kindness Tohoku people have shown will be dealt with as an exception. It is because the logic of democracy is to avoid causing the worst conditions not to seeking the best ones: we can not suppose that human nature is such good. This system often make us feel frustrated but sports and arts will help us because they are to aim the number one or make the best performance.

The logic to accept a little patience to escape from the worst situations is also well-known in relation to arguments about nuclear power plants and terminal cares. I consider what we can do is to keep considering and discussing them because there seem to be no absolute solution which satisfies everyone.

No matter how much people expect to get a better future from their efforts for the reconstruction, most of them can not be satisfied. Moreover their requests will be different from their originals even if it is incorporated in it. It is because, for example, different people have different interests and they can not be satisfied at the same time.

Then, it is said that to keep insisting is important for the problems. It is also effective to choose persons to whom people speak only if they can keep being just. The discussions themselves are supposed to be valuable from the macro point of view.

As to choices of ideas, to decide by a majority vote is generally admired. It is necessary to concern burdens for minorities seriously too. And I consider it is permissible to adopt a few ideas from specialists which are in the minority but can reach a consensus in future or have special values.

参考資料

- [1] 筆者のウェブサイトにしたチャリティーのページ (日本語) :
<http://www.ethics-level.com/charity-jp.html>
- [2] 関口海良, 東日本大震災およびそこからの復興に関する倫理レベルからの論点整理:「平等」について, 2011.
- [3] 関口海良, The sixth and the seventh rules of “design with discourse” for design from the ethics level, 2011. (in Japanese)